

「安全文化」それは 三島が誇る財産

業務内容を教えてください。

乗合バスと貸切バス、旅行業、自動車整備の4事業です。事業規模が一番大きいのは乗合バスですね。「地域の発展や安全への貢献」ということを、会社の大きな目標として掲げています。

地域との関わりや地域の中で果たす役割についてどのようにお考えですか？

安全を最優先に

まず「安全」を最優先することが、結果的にお客様のためであり、社員がそれを目標に歩むことが永続的な事業運営にも繋がると考えています。

地域の発展を支える

そのための活動として、小学校低学年児童、幼児や高齢者を対象とした交通安全教室を開催し、交通安全の意識向上を目指しています。バスの乗り方を教え、バスの死角を運転席から見てもらい、意識付けをしています。

また、事故防止対策の意味で、全てのバスにドライブレコーダーを取り付けています。防犯にも役立ち、犯罪的な要素の画像があれば、警察への情報提供も視野に入れています。

キャビンアテンダントは飛行機の入口で笑顔で挨拶しながら、空の上での有事の際に、乗員乗客の手助けになってくれそうな人を探しているそうです。

同じように毎日多くの人に接するバスの乗務員も、「安全な運転」の次のステップとして、車内で事故が起きないように、人を見る目を養うことが重要です。

バスを利用した

地域貢献の形

沼津のご当地アイドルオレンジポットや、チアリーディングチームのパワフルキッズのラッピングバスを走らせて、地域で活躍する青少年の応援ができたかと考えています。

また、昔の、緑を基調にしたレトロなカラーリングのバスが4台あります。普通バスは軽油で走っているのですが、その4台のバスはバイオディーゼルという天ぷら油から作った燃料で走っています。カーボンニュートラルの考え方により、二酸化炭素の排出量を抑制でき、環境に配慮した地域貢献に繋がると考えています。

事業の中で「文化」を意識していることはありますか？

思います。

そして、自治体、観光協会を含めた中でお互いに理解を深め、興味が湧くようなことをしていくべきだと思います。同業他社ともコラボしながら、進めていくということも必要ではないでしょうか。

アピール力、発信力はこうした強くなるのでしょうか

観光という点、どうしても近い地域でお客様の引っ張り合いになってしまいます。

伊豆へ来ると聞けば、「熱海へ来て下さい」「伊東へ」「下田へ」と。本当はそれではいけません。各地域が協力して、伊豆全体の良いところを引き出せたら、それは素晴らしい発信力になると思います。

小田原市と箱根町のように、共存共栄になれば、この地域も良い形になっていくと思います。新しくできた「美しい伊豆創造センター」の取り組みにも期待しています。

伊豆箱根バス株式会社

代表取締役

杉山 武司 氏

プロフィール

1951年伊豆市生まれ。修善寺工業高等学校（現伊豆総合高校）卒。1969年伊豆箱根鉄道株式会社入社。同社自動車部長、伊豆箱根自動車株式会社（現伊豆箱根バス株式会社）取締役、伊豆箱根バス常務取締役を経て2013年より現職。趣味は野菜作り、旅行、ゴルフ。

私たちが行っている取り組みは、「安全文化」と言えます。安全というのは、人類が長い間培ってきた最も尊い文化ではないかと思っています。それを我々が継承して次の世代に繋げていく必要があります。

三島が誇る「安全文化」

毎年三嶋大社で、交通安全協会や交通関係する事業者で祈願をします。この慣わしは昭和9年（1934）に三島警察署長（当時）の藁科氏の発案で始まりました。その頃、三島には自家用車が2台しか無かったそうです。そのような交通環境の時に交通安全の取り組みを始めたそうです。

全国的に交通安全運動が始まったのは昭和23年頃、交通安全協会ができたのも戦後なので、交通安全に先駆的に取り組んでいる町だということですね。

三島は人口が10万人を超える市であるにも関わらず、全国的にも珍しいほど交通事故が少なく、交通安全協会や市民の方々の交通安全に対する意識がとても高いと言えます。それも三島の大きな財産、文化だと思います。

大社の前の宮司さんが「自然界にある材料を使って、自然にある原理を元に、自動車は動いている非常に便利なものであるけれども、それは使う人の気持ちによって、凶器にもなりえる。」とお話をされていました。社員にも思い出すとこの話をします。



「いずはこねふれあいフェスタ」での一幕

伊豆観光に求められている魅力はどんなことでしょうか？

伊豆半島は日本の縮図だと思っています。海の幸も山の幸も豊富で景観も素晴らしいです。そしてやはり富士山ですね。私は天城から通勤していますが、朝、伊豆中央道の江間トンネルを抜けると、真正面に富士山が見えます。すごく清々しい風景です。三島の街の中から見ると富士山も素晴らしいです。フェリーから見ると富士山も素晴らしいです。伊豆という所は三島からだるま山の方まで富士山を見る絶景ポイントがたくさんありますね。そういう所をもっともっと知っていただくことも必要じゃないかと思えます。

歩ける街の魅力を アピールする

近年観光の形が様変わりしています。今までは決まった名所に行く目的が多かった

業務内容を教えてください。

乗合バスと貸切バス、旅行業、自動車整備の4事業です。事業規模が一番大きいのは乗合バスですね。「地域の発展や安全への貢献」ということを、会社の大きな目標として掲げています。

地域との関わりや地域の中で果たす役割についてどのようにお考えですか？

安全を最優先に

まず「安全」を最優先することが、結果的にお客様のためであり、社員がそれを目標に歩むことが永続的な事業運営にも繋がると考えています。

地域の発展を支える

そのための活動として、小学校低学年児童、幼児や高齢者を対象とした交通安全教室を開催し、交通安全の意識向上を目指しています。バスの乗り方を教え、バスの死角を運転席から見てもらい、意識付けをしています。

また、事故防止対策の意味で、全てのバスにドライブレコーダーを取り付けています。防犯にも役立ち、犯罪的な要素の画像があれば、警察への情報提供も視野に入れています。

キャビンアテンダントは飛行機の入口で笑顔で挨拶しながら、空の上での有事の際に、乗員乗客の手助けになってくれそうな人を探しているそうです。

同じように毎日多くの人に接するバスの乗務員も、「安全な運転」の次のステップとして、車内で事故が起きないように、人を見る目を養うことが重要です。

バスを利用した

地域貢献の形

沼津のご当地アイドルオレンジポットや、チアリーディングチームのパワフルキッズのラッピングバスを走らせて、地域で活躍する青少年の応援ができたかと考えています。

また、昔の、緑を基調にしたレトロなカラーリングのバスが4台あります。普通バスは軽油で走っているのですが、その4台のバスはバイオディーゼルという天ぷら油から作った燃料で走っています。カーボンニュートラルの考え方により、二酸化炭素の排出量を抑制でき、環境に配慮した地域貢献に繋がると考えています。

事業の中で「文化」を意識していることはありますか？

思います。

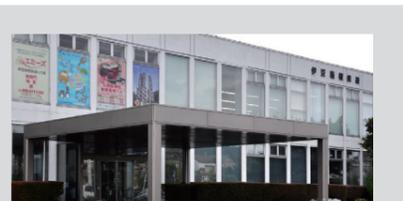
そして、自治体、観光協会を含めた中でお互いに理解を深め、興味が湧くようなことをしていくべきだと思います。同業他社ともコラボしながら、進めていくということも必要ではないでしょうか。

アピール力、発信力はこうした強くなるのでしょうか

観光という点、どうしても近い地域でお客様の引っ張り合いになってしまいます。

伊豆へ来ると聞けば、「熱海へ来て下さい」「伊東へ」「下田へ」と。本当はそれではいけません。各地域が協力して、伊豆全体の良いところを引き出せたら、それは素晴らしい発信力になると思います。

小田原市と箱根町のように、共存共栄になれば、この地域も良い形になっていくと思います。新しくできた「美しい伊豆創造センター」の取り組みにも期待しています。



伊豆箱根バス株式会社

静岡県三島市大場 300 番地

<http://www.izuhakone.co.jp/bus/>